

幸せの価値観 Values of Abundance

神奈川県立保健福祉大学 学長 村上 明美
Akemi Murakami, President of Kanagawa University of Human Services

新型コロナウイルスのパンデミックは、これまでの人間の価値観や考え方、行動に大きな変化をもたらした。人間にとって「真の幸せ」とは何かを深く考える機会となった。

世界各国の経済状況を示す「GDP（国内総生産）」では、2023年の世界GDPランキングで日本はこれまで維持してきた世界3位から4位に転落した¹⁾。1位はアメリカ合衆国、2位は中国、日本を抜いて3位になったのがドイツである。日本が4位に転落した理由は、円安による影響や生産性の低迷などが考えられる。

GDPは国の豊かさを表すひとつの指標ではあるが、人々がどのくらい幸せに生活を送っているかは、GDPという経済的観点だけではなく、別の判断基準が必要であることが指摘されている²⁾。

ノーベル経済学賞を受賞したダニエル・カーネマン³⁾は、一定水準までは収入が上がるほど幸福度も増えていくが、その水準を超えると幸福度は上昇しなくなるという研究結果を公表している。「収入と幸福は相関しない」ことを示すエビデンスが示されたのである。

ところで、昨今では「ウェルビーイング (well-being)」という言葉が注目されている。

「ウェルビーイング」は、世界保健機関（WHO）が設立された1946年に初めて使用された。世界保健憲章の健康の定義「健康とは、単に疾病がない状態ということではなく、肉体的、精神的、そして社会的に、完全に満たされた状態にある：Health is a state of complete physical, mental and social well-being and not merely the absence of disease or infirmity.」に用いられている。日本語では「健康」「幸福」「満ち足りた状態」などと訳されている。

「ウェルビーイング」や「幸福学」の研究者である前野⁴⁾は、幸せには「長続きする幸せ」と「長続きしない幸せ」があることを指摘し、「長続きする幸せ」は「非地位財」による幸せ、すなわち、健康や環境による幸せ、愛情ややりがい、自由など、お金では買うことができないものを指す。そして、人間が幸せを感じる因子を、因子分析によって以下のように整理した。①「やってみよう」因子（自己実現と成長）、②「ありがとう」因子（つながりと感謝）、③「なんとかなる」因子（前向きと楽観）、④「ありのままに」因子（独立と自分らしさ）の4因子である。

「人生100年時代」を個々人が幸せに過ごしていくうえで、これらの4因子は興味深い示唆を与えてくれる。「ウェルビーイング」という用語は決して新しくはないが、今の時代だからこそ、人間の幸せを考えていくうえで、これからも探究する意味がありそうである。

【文献】

- 1) 内閣府. 新藤内閣府特命担当大臣記者会見要旨 令和6年2月15日.
https://www.cao.go.jp/minister/2309_y_shindo/kaiken/20240215kaiken.html (参照2024-12-15)
- 2) 横山直, 有野芹菜, 門野愛. Well-being “beyond GDP” を巡る 国際的な議論の動向と日本の取組. 内閣府経済社会総合研究所.
https://www.esri.cao.go.jp/jp/esri/archive/e_rnote/e_rnote090/e_rnote082.pdf (参照2024-12-15)
- 3) ダニエル・カーネマン著／友野典男監訳・山内あゆ子訳. 心理と経済を語る. 楽工社. 2011.
- 4) 前野隆司. 市民公開講座特別講演 2 幸せのダイナミクスとデザイン：日本機械学会 (No.16-15) Dynamics and Design Conference 2016 USB論文集. 2016.

